

説教 「軛(くびき)の形」

聖書 イザヤ書 6:9/マタイによる福音書 11:28~30

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう(マタイ 11:28)」。イエスの慰め言葉、疲れ果てて心身が崩れそうでも、競争現場の最前線を突っ走る者には響かない。

喫茶店のトイレで見かける「あいだみつを」の「まちがったっていいじゃないか、人間だもの」という慰めメッセージも、病院や裁判所には掲示できまい。愛の招きは、その時、その場でこそ響く。

「休ませてあげよう」に続く言葉は、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる(11:29)」。 「休む」と「イエスの軛を負う」はどう関連づけられるのか。

「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである(11:30)」。荷が軽いから、休めるということか。「軛」とは、畑の鋤や荷車を引かせるために、並べた二頭の牛の口まわりにつける木製器具。

直感的に思い浮かぶのは、牛の一头が私で、もう一头がキリストという寓意。軛は、重荷を「共に分かち合う」という比喩だろうが、そのイメージだけではどこか浅く、軛の底部に届いていない気がする。

「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない(10:38)」とイエスは語る。

えっ、そうなの。十字架は「疲れた者、重荷を負う者を休ませる(11:28)」ために、「私を負って」くださる贖いの犠牲ではなかったか。その通りだ。

神の子イエスは、私の重荷(罪)を負うがゆえに、私の十字架を負い給う。信仰とはその真実を「受け入れる」応答。

イエスの十字架を「受け入れた」者は「自分の十字架を担ってイエスに従う(10:38)」。これがイエスと共に引く軛(11:29)の形なのだ。

預言者を介して命じられた神の戒め、「主は言われた。〔行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな、と〕(イザヤ 6:9)」。

「よく聞け、よく見よ」は普通に分かる。だが「理解するな、悟るな」とはどういうことか。通常、素早い理解力は歓迎され、多く人は「自分がもっと頭脳明晰だったらいいのに」と思っている。

ただ、聞いてすぐ理解し、見てすぐ悟る能力とは、反応が早いある種の小賢しさで、すでに「分かっている」ことの手際いい流用ではないのか。

共に軛を負い、イエスと並んで鋤を引くイメージ(マタイ 11:30)だけでは、「聞いてすぐ理解し、見てすぐ悟る」頭の良い答えに過ぎない。

「よく聞けば」謎が生まれ、「よく見れば」未知が膨らむ。手際のいい理解は、教えられた正しさに停滞すること。手っ取り早い悟りは、人間の狭苦しい義に過ぎない。

負うべき軛(11:29)とは、二頭の牛が横並びで引くものではなく、イエスの十字架と、私の十字架が、二重になって響き合うイメージ。

「自分の十字架を負ってイエスに従え(10:38)」なんて言われると、いかにも厳しそうだが、そんなことはない。何よりもイエスの方から「私の十字架」を負い、「私」はすでに担われている。

ゆえに軛は一人ひとりに応じて、担い甲斐ある絶妙な重さになっている(11:30)。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう(11:28)」。 「休ませてもらうよう」がうっすら見えてきた。イエスの許で重荷を降ろして休む。休んだら「自分の十字架を負って従う(10:38)」。理解せずとも、悟らずとも、一步一步、噛みしめるようにして従っていく。



《おまけのひとこと》

重い荷が肩に食い込み足がふらついたら イエスの許で休む 十分に休息した頃 イエスは立ち上がって歩み出す 従っていくと 荷の重さを足の裏に感じて 支えられていることをはっきり知る